空からの破壊者

鴉姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空からの破壊者

【Ｎコード】
Ｎ１０７７ＢＡ

【作者名】
鴉姫

【あらすじ】
魔法異世界ファンタジー。空の世界（アスクレス）と地の世界（スタンロット）。
空の世界から堕ちた少女は相棒の剣士と新たな仲間と共に目的の為動き出す。失われていた世界の真実。世界の行く末は…／少年に扮する魔法使いの主人公、主人公思いの剣士、おてんばな魔法使い、のんびり屋の大剣使い、毒舌家の魔銃使い。個性豊かなキャラが繰り広げる冒険ものです。（フォレストより重複投稿させて頂いております）

プロローグ（前書き）

魔法異世界ファンタジー。空の世界（アスクレス）と地の世界（スタンロット）。
空の世界から堕ちた少女は相棒の剣士と新たな仲間と共に目的の為
動き出す。失われていた世界の真実。世界の行く末は…

プロローグ

「ライア…？」

橙色の髪をもった青年は、困惑しながらその名前を呟いた。

「そう。それが新しい名前。ああ、口調や容姿も変えなきゃいけないわね」

それに対するは長い水色の美しい髪をもった少女。その目は南洋の海の色をしている。

「そんな趣味が出来たのか…」

青年は横目で少女をじっとりと見た。

すると少女は溜め息をついて反論する。

「バカか君は。もしもの時の為に正体を隠すためだ。それに、この姿の方が気を強く持てる気がするんだ」

少し上から目線な口調で、青年を堂々とバカ呼わばり。

そして少女…ライアは上を見上げた。そこには、紛れもない空があった。

―数時間前

「どうして、どうしてですか、王様！！」

その者の叫びを王は冷めた表情をして聞き流した。

「フィオナ、貴様は掟を破ったのだ。大魔法使いたるもの掟は必ずや守らなければならない」

王の隣にいた男が代わりに答えた。

ここはアスクレス。つまりは空の世界の、とある国の中心部にある宮殿。

クリスタルで造られたその建物は、晴れの日は光を反射し輝き、雨の日の後は露に濡れ、さらに美しくキラキラと輝いた。

内装も全てがクリスタルであり、この王の間の柱、壁…王の玉座までに使われている。

そのことによりここは『クリスタル・パレス』と呼ばれていた。

王はその『クリスタル・パレス』の王の間に鎮座された玉座から、ゆっくりと立ち上がる。カツン…と小さな音が、静まり返っている王の間に響き渡った。

王と対峙する、フィオナと呼ばれた女は必死に弁明する。

「民を守るためには仕方がなかったのです。だから私は…」

「少し調子に乗りすぎたのではないか？史上最年少で大魔法使いになった事が原因だろう」

王の隣の男は反論する隙を与えない。少し寂しそうな表情を貼りつけて男は続ける。

「罰を受ける事も覚悟しなければならない」

それはフィオナには衝撃的な言葉だったようだ。

「だ、だって」

子供が言い訳によく使う「だって…」。それ程までにフィオナには逃げ場所がなかったのだ。

その時王は手を挙げた。

「フィオナ、お前の言いたい事はわかった。しかし掟は掟だ。これからお前の刑を決定する。ラルゴ、フィオナを地下牢にいれておけ」

自分は万事わかっているという顔。

フィオナの表情が凍りついた。唇が青くなり震えだす。一瞬何か言いかけたが、口を閉じる。

そして静かに、沈黙したフィオナは連行されていった…。

大きな音を立てて閉まる鉄格子。

フィオナは体を丸めて縮こまった。

「飯だ」

1回だけ食事を置きに誰かが入ってきたが、フィオナはピクリとも動かなかった。

フィオナは1度だけ、魔法で脱獄をしてしまおうと考えた。

このままの状態が恥ずかしくて、辛くて…。様々な感情がわき出てきたのだ。

しかしやめた。

どうせ魔法を無効化する術がかけられている。

そうなったらいくら自分でも何も出来ない。

それに、脱獄って悪い人がすること、自分は正しいことをした。

だから私はそんなことしない。フィオナは自分のしたことを良いことだと信じていたのだ。

だが…現実は辛いもので、王の下した決定は、

「フィオナ・クルーを下界堕落処分に科する」

フィオナは信じられなかった。聞き間違いだと思った。

「これでも死刑は免れたんだ」

ラルゴはそう言った。少し残念そうな顔をして…。

自分と同じ大魔法使いは言った。

フィオナの処分は7日後。最後にそう告げて彼は去っていく。

その去っていく背中を見つめながらフィオナは泣いた。

どうして？

どうして？

そしてフィオナは1人苦しんだ。

7日間牢獄の中で。

このニュースはアスクレス中を駆け巡った。

そして…。

『フィオナ・クルーの最後』

つまり、

『大魔法使いの最後』

それを見に何千人もの人が集まった。

『大魔法使い』

それは、最高クラス難度の魔法を会得し、アスクレス魔法協会に認められた者だけが名乗れる称号。

世界に数えるほどしかいない存在。

それが下界に堕とされる。

下界。あるいは地の世界という、

あるのかわからない伝説の地に。

堕とされたものがどうなったのか、誰も知らない。

死んだのか。

生きているのか。

大抵の者は生存を否定した。

そしてそこに…

フィオナは堕ちようとしていた。

まだ心の脆い、

純真な、

１６歳の少女が……。

「恥さらし！」

「子供のくせに出しゃばるからだ」

激しい罵倒の嵐の中、彼女は現れた。

彼女の魔力を無効化する、白い拘束衣を着て。

彼女の生まれたこの国の末端。

いろいろなことがあった、思い出の国。

「フィオナ・クルーの刑を執行する」

フィオナは…

……堕ちた。

暗い闇の海の中に。

上には青空。

なのに何故か下には闇。

そんな世界から。

アスクレス。

空の世界。

空に浮かぶ島々。

故郷。

フィオナは何を思っていたのか。

フィオナの心が、

フィオナの純真な心が、

少しずつ、

壊れゆく…。

そんなフィオナに、

堕ちてくるもう一つの影が見えた。

「フィオナ！！」

それはそう叫ぶ。

フィオナはそれを見る。

「リューラ…」

そう呟くと、フィオナは大きく手を伸ばした。

その男はその知らせを聞いた途端、何も持たずに家を飛び出した。

「フィオナ…！」

そうとだけ言って。

あの場所に着いたとき、

ちょうどフィオナが堕とされるところだった。

何も考えず後を追った。

王が何かを叫んだ。

民衆も騒ぎたてる。

それらをすべて無視して。

フィオナの水色の長い髪を目印に、

宙を泳ぐ。

「フィオナ！」

そう叫ぶ。

そしてフィオナの服の端を掴むことができた。

「どうして？」

「何が？」

フィオナの問いは、何故自分がこうなったことかと思ったが、後にはこう続いた。

「どうして私の後を追ってきたの？」

リューラは少し考えてから言った。

「お前、1人じゃ何もできないだろ？心配だから来たんだよ」

「そっか」

暫く無言でいた2人だが、フィオナが口を開いた。

「あ…」

「ん？」

「ありがとう…」

リューラは顔を背けて、

「い、いいんだよ。俺が勝手に来ただけだから」

と答えたのだった。

第1章　1話

「クラン、少し待ってくれ。休憩しよう」

黒髪を肩まで伸ばした少年…に扮した少女は燃えるような橙色の髪の青年に声をかけた。

「だらしないな、おい。普通の人間より体力ないんじゃないか？」

少女はゼェゼェ言いながら文句を言う。

「魔法使いには体力はいらない。精神力が必要なんだ！」

「はいはい。わかりましたよ。でもないよりはあった方がいいだろ？全くお前が姿変えてからなんだか我儘が増えたか？」

少女はむっと押し黙る。

「僕だって好きでやってるわけじゃない。もしこの世界にアスクレス人がいて僕のことがバレたら大変だろ。それにさっきも言ったけどこれの方が気を強く持てる」

「わかったよフィ…ライア。くそっ名前までっ。めんどくせ！」

それに対し少女はため息をついた。そしてクランの頭を、

「イテッ」

ぺちりと叩いた。

アスクレスから堕ちた2人は一命をとりとめた。

闇を抜けたと同時に拘束衣の魔法を封じる効果が消えたのだ。

それによって魔法が使えるようになったので、地上への激突を回避し、安全に着地出来た。

しかし堕ちたは一面草原。人っ子1人いない。

「魔法が使えるから困りはしないけど…」

「服装とかおかしくないか？時代にあってるか？」

「いや、そういうことじゃなくて…」

「そもそもさ、俺ら自身が変な存在かも…」

「？」

「ほら、たとえばここの住人はみんなきのこから進化した人だったりして」

クランの意見に、ライアはあからさまに嫌そうな顔をした。

「やめてくれ。僕はきのこが大の嫌いなんだ」

想像をしてしまったらしく顔色が悪くなっていく。

「おいおい、大丈夫か？」

本気でライアを心配しだすクランに、

「精神力、精神力…」

と弱々しく返すライアだった。

さわさわと草が揺れる。

上に自分たちの堕ちてきた闇が見えない。

アスクレスからは見えたはずのそれがない。

青空が見える。

けれど浮かない陸地。

似ているのに違う世界…。

地の世界…。

そんな謎に包まれた世界を2人はノロノロと歩いていたが、しばらくして歩き疲れ、草原に寝転んだ。

「なんなんだろーな、この世界は」

不意にクランが呟いた。

ライアは答えない。何か真剣に考え込んでいる。

クランは暇そうに草をいじったりした。

そして草の上をごろごろと転がるうちにライアから離れていく。

しかし草原がただ広がるばかりだったはずの場所なのに、クランは何かにぶつかって止まった。

「？」

疑問が溢れ出る

よっこらしょっと起き上がるとそこには……。

小さな犬がいた。

「どこから来たんだお前」

クランが尋ねると、犬は尻尾を振り振り甘えるように近づいていく。

「クラン？」

そこでライアがようやくごろごろとクランが離れていったことに気がついた。

「んー、可愛いな。どこから来たんだろ」

「おい」

ライアが尋ねるが耳に入っていないようだ。

「ああ。ここの穴から出てきたのか」

「おい！何で君は犬に囲まれてるんだ！？」

イライラしだしたライアが叫ぶ。

そこでようやくクランが振り返った。

なんと犬に囲まれている。

「なんか俺人気者だな」

ライアに構ってもらえず、テンションダウンしていたクラン。犬に囲まれ小さな子供のようにのほほんとしている。

ライアは嫌な感じがして感覚を研ぎ澄ました。

「ヤバいな…」

「どうした？」

「確かに人気者だな…

獲物として……」

第1章　2話

その言葉とともにあらゆる場所から犬らしきものが飛び出してきた。

小さな体だが、数が多く厄介そうだ。

数十匹はいるだろう。

「クラン…君が手なずけようとしたんだから、君がどうにかしてくれ」

よっこらしょっとライアが立ち上がりお尻をぽんぽん叩きゴミを払った。さも自分は関係ないと言わんばかりに。

「どうやって？」

しかしクランは不思議そうに尋ねる。

「どうやってって…君の得意な剣術でささっと……」

そこでライアの言葉が止まる。気づいてしまったのだ。

クランの腰に剣帯がついていない。

「ク…クラン…剣はどうしたのかな…？」

ライアは顔をひきつらせながらクランを見上げる。

「アスクレスの端からとんできたんだぞ。剣をもつ時間なんてなかったんだよ」

「……じゃあ素手でやればいい」

あっさりと言い放つライアに、クランは適当な犬を指差して言う。

「つってもさ、あの口の中見ろよ。数匹ならまだしもあの数だとき
ついぞ」

開いた口の中には、通常の犬よりも鋭い歯がズラリとならんでいる。

「あーめんどくさい。何のために君は来たんだ」

「なんでって…」

「私の為に雑用をしてくれるんだよね？」

猫をかぶってライアは満面の笑みでクランを見上げた。

クランはライアにフィオナの面影をみる。

どんな時も笑顔でいたフィオナの面影。

でも、時々わがままで、ずるそうに笑う。

「……わかった。でも一緒にやってくれよ。さすがに剣なしじゃちまちましてるものは大変だからさ」

ライアはしょうがないなぁと伸びをした。

「やるぞ」

クランが動いた。

弱音を吐いていた時とは別人のように犬の牙をかわしていく。

「神速だなあ」

ライアはのんびりとそれを眺めつつ呪文を唱える。

「『対象を貫け、雷針』」

簡単な魔法なのだが、生み出された雷性質の無数の針は犬に的確に突き刺さる。

あっという間の出来事だった。

「絶対最初からライアがやった方がよかっただろ！」

クランは自分の行動が無意味だったとわかり文句を言うが、ライアはその言葉を無視して、

「早くいこう。気絶してるだけだから、起きたらまためんどくさい」

口癖のように再びめんどくさい発言をして、さっさと先へ歩いていってしまった。

「待てってば」

慌てて追いかけるクラン。

すると、

「ん」

ライアがその言葉通り立ち止まった。

てっきり待ってくれたのかと思ったクランだったが…。

「あれはなんだ？」

気が付いてみれば草原は終わり崖の上のようなところに立っていた。

ライアの指差す先には青い大きな水溜まりがある。それが立ち止まった原因のようだ。

「湖にしては大きすぎないか？」

ライアは興味深そうにじっと目を凝らしている。

「うーん…あれだ。陸地と陸地の間にあるのが空じゃなくて、この世界では水だってことだろ」

目を細めて遠くを眺めつつ意見を述べるクラン。

「ほら、船が走ってる。そこはアスクレスと同じなんだな」

クランはきちんと質問に答えた。しかしライアは何故か少し不機嫌そうな顔をしている。

「どうした？」

「僕のわからない事がクランにわかるなんて…」

「……」

「クランはただの筋肉バカだと思ってた」

さらに、さらりとひどいことを言った。

しかしクランは気にしない風を装って、ライアに問うた。

「とにかくだな、これからどうするよ。というかお前はどうしたい？」

クランは珍しく至って真面目だった。

さりげなく視線をそらすライアの前に立ちはだかる。

「お前が掟を破って堕ちたのは事実だ。そしてお前は…この後どう生きる？」

「僕は…」

しばらくして、ライアが重々しく口を開いた。

「…私はアスクレスへ行く方法をこの世界で探しだす…。その為に私は……この世界を……知らなければならない…。そして……、賢者に会いたい」

賢者。

アスクレスに只1人しか存在しない者。

全てを統べる者…。

クランは深く頷いて、

「賢者か。難しい目標だな。だが、わかったわかった。だからさ」

厳しい表情を緩める。

「そんな神妙にしてくれるなよ。もっとさ、明るく行こうぜ」

「…お気楽な奴め」

ライアはふんっと顔を背けた。

その後、

「君のような何もできない役立たずの為に船をつくるからちょっと待っててくれ」

ライアはそう言うとなにやら呪文を唱えはじめた。

その間暇なのでクランは目の前に広がる風景に浸る。

しかし…

「なあライア」

「なんだよ、集中できないじゃないか」

「俺の見間違いかもしれないけど…。なんか、船が向かってきてないか？」

その言葉にライアは作業をやめて顔を上げた。

「…どうしてあれはこっちに来ている？」

「俺に聞くなよ！とにかく、なんだかよくわかんないけど隠れようぜ」

クランに賛成したライアが身隠しの呪文を唱え、他人から見えなくなった（つまり透明になった）２人は息をひそめる。

第1章　3話

「おーい。みんな到着したよー。起きてよー。特にシリウスくーん」

若い男の声が聞こえる。

「なんです？僕は昼寝中なんですよ。勝手に大声を上げないでください」

「この船、ずっと運転してきたの誰だと思ってるの？アリシアもなんか言ってあげてよ」

「いいんじゃないかな。睡眠は大事だよ」

「どうしてみんな俺をいじめるのかな…」

男女3人組のようだ。

「…わかりましたよ。起きればいいんですね」

そう言って目を擦りながら身を起こしたのは、耳下ほどの長さの白銀の髪を持った少年。

「じゃあここで待ってます。いってらっしゃい」

その発言に、安心しかけていたもう1人の焦げ茶色の髪を持ったが青年が慌てだす。

「ほら、もう受けちゃった依頼だしね。わがままいってどうにかならないわけだからさ」

3人の言い争いは続く…。

その様子を観察していたライアとクラン。

「言葉は同じか…」

「そうだな。で、あいつらはなんだ」

「厳めしい人じゃないみたい」

「変な奴等だな。でも、あの女の子はかわいいぞ」

クランが示すは長い金髪を垂らした少女。

「アリシアちゃんか…」

そんなクランをライアは優しくつねってあげた。

「ぎゃあ！！」

するとクランが驚いて叫んだ。

ライアは今の行動を悔いる。

クランはリアクションにたけた奴で戦闘中であれなんであれ、癖なのかプライドなのか必ず反応する。

緊張感が無いのだろうか。

通常ならどんな場合にも対応するため気を張っていなければならないのに。

でもそれは今の世界全体に言えた。

誰かに頼っていたい。誰かがいるから大丈夫。

かつて、アスクレス魔法大戦が起こっていた時代にはそんな事はなかっただろう。

人は皆、狂ったかのように他人を観察し自分を守ろうとする。

しかし世界は変わった。

平和に。

偽りの平和に…。

クランの声がして、３人の言い争いは止まる。

「なんか…叫び声聞こえなかったかい？」

案の定気づかれた。

「なに？幽霊かな」

アリシアは何故かワクワクしているようだ。

逆にさっきまでやる気なしだった少年、シリウスが素早く身構えた。

「誰です？コソコソしてないで姿を現したらどうですか」

もう一人の男はまいったなぁと言わんばかりに頭をぽりぽりかいた。

「クランのばか…」

ライアにはそう呟くことしか出来なかった。

そして重要なことに気付く。

この世界に魔法は存在しているのか。

もし存在してなくて、ここで戦闘になったりしたらどう戦う？

剣がなくてもクランは少しは戦えるが、自分が魔法を使ったら正体が…。

自分の事をけなすつもりはないが、正直魔法ナシの自分は…どうしようもなく弱い。いや、

無力だ。

現実に目を戻す。

「ライア、魔法を解け」

クランは唐突に言った

「えっ、でも…」

何か策があるらしい。

「……解」

ライアはしぶしぶ魔法を解除。

茂みから這い出る。

そうして2人と3人は対峙した。

先に口を開いたのは相手だった。

「誰ですかね？人里離れたこんな場所に」

クランが答えた。

「それはお前らも一緒だろ」

「僕たちには正当な理由があるんですよねぇ。それに対してあなたたちはなんです？」

ライアはひやひやする。するとクランはとんでもないことを言い出した。

「実は俺達…秘境の地で学びを受けていてな…」

はっ？

はぁ！？

何を言い出すんだ！

「最近課程を終えたんだけど、そうしたらポイって放り出されてな、あてもなくさまよってんだ。外の世界にふれたこともなくて無知識なんだよ」

なんだその作り話！怪しいにも程があるぞ！

ほらあのシリウスって奴も怪しんで…

「ああ…そうだったんですか。すいませんね、怪しんでしまって…」

ない？信じたのか？

「…って思うわけないでしょう。馬鹿ですね、あなたたちは」

考えたのはクランです！でも、一瞬期待してしまったからやっぱり自分もなのか…。

ライアは自分のバカ加減に腹が立った。

シリウスは冷たい氷のような表情で2人を観察していたのだが。

「真実を答える気が無いなら…。戦うことになりますよ」

そう言うとシリウスは素早く両手に何かを構えた。すでに戦闘モードだ。

「銃？ただの銃で俺達に太刀打ち出来ると思ってんのか」

するとシリウスは薄く笑う。

「世間知らずは本当みたいですね。これは魔銃というものです」

「魔銃…」

（こんな物はアスクレスにはなかった。知らない武器…注意が必要だな）

シリウスは余裕そうに言う。

「さあ、どうします？戦いますか？あと十秒待ちます。十、九、八、七…」

クランはライアに尋ねる。

「（どうするんだよ）」

「（僕に振るんじゃない！でも最悪…戦闘だな。記憶を書き換えれ

ば問題ないが、仲間とかに知られて大事になりなくない。魔法が確認出来れば話が早いけど）」

時間は迫る。

「三、二、一…」

「（やるか！？）」

戦闘が始まるかというその瞬間、

「ストップストップ～。みんな落ち着いて～」

場違いなのんびり声が響いた。

「…っつ、なんですかイアル！！」

声の主は名前が判明していなかったもう1人の男だった。

「正体がわからないから戦うっておかしいでしょ。シリウス、武器を収めて」

シリウスは苦々しい表情になったが渋々武器をしまった。

「ごめんねー。うちのシリウスが迷惑かけちゃって」

「は、はぁ」

相手の意図が読めない。

「でさー。唐突に聞くけど、君たち…」

ライア達は耳を疑った。

アリシアとシリウスもまさか、という顔をしている。

「…空の世界から来た人なんじゃないかい？」

第1章　4話

図星。

その言葉がとても似合う状況だ。

「な、なんの事だろうなライア」

クランは冷静さを欠いて言葉がうわずる。

問われたライアは無言のままだ。

「でも確かに…それなら今までのつじつまが合います」

シリウスはニヤリとした。

「いくら世間知らずでも、この世界の名前位知っていますよね」

クランはとにかく何か名前を言う。

「くっ、…スレクスア…か？」

ただ逆から読んだだけ。当たっているわけもなくシリウスは満足げに言った。

「確定ですよ。では正解を空からの旅人さんに教えてあげましょう。この世界の名は…

『スタンロット』

広大なる大地と海によって創られし場所」

ライアは口を割った。

「…確かに僕達は空からやってきた者だ」

すると、

「凄い、凄いよイアル！大発見じゃない」

アリシアが興奮して跳び跳ねた。

ライア達がは首を傾げるとイアルが説明した。

「今まで空から物が落ちてくることはしょっちゅうあったし人もいたけど…みんな、死んでたんだよ」

ライアは嫌な可能性に思い当たった。

「もしかして…」

「うん。おめでとう。空からやってきた生存者1号さん」

なんてこった…来てまだ1日も経ってないのに正体がバレるなんて…。

「まあ今までで記憶を消しちゃえーとかいう人もいて判明してないのもいるだろうけど…俺達は記憶を消されるつもりはないよ」

イアルの言葉にピクリと反応するライア。

「僕の魔法から逃れられるとでも?」

「やっぱあなた魔法使いなの?そういう雰囲気すっごい出てたよ。ちなみに私も魔法使いなんだっ」

アリシアは明るい調子で気さくに話すがライア達はそれどころではない。

「不意うちで悪いが…『記憶操作　忘却』！」

ライアが呪文を唱えると同時にイアルが自らの武器、大剣を抜いた。

「イバンヌル」

何かを言うと剣を掲げる。

ライアには見えた。自分の魔法が、剣に吸いとられていくのを。

「なっ！？」

驚愕の中で自らの不利を悟るライア。

「ライア、何だあれは！？」

「だからわからないことをいちいち僕に聞くなよ！！」

後退しながら叫ぶ。

「魔法使いの君には俺と戦っても勝ち目はないよ。体術でも俺の方が上だろうね。しかしその横の君…よく鍛えているようだ。いい勝負が出来ると思うけどこちらは3人。勝てますかねぇ」

「くっ」

しかも武器を持たないクラン。状況は絶望的だ。

そんな2人をニコニコ顔で眺めながらイアルが言った。

「そこで…取引しないかい？」

「取り…引きだと？」

「ええ。俺達にも少し事情があってね…。要求をのんでくれたらここでどうこうしたり、おおっぴらに発表したりしないからさ。だから、」

イアルは急に笑顔になって言う。

「俺達と一緒に旅をしよう！」

「「「…は？」」」

ライアとクランだけではなく、シリウスの声が重なった。

見るとシリウスの口がぽかーんと開いている。

正直それを見ているのが面白いと思ってしまったライア。

「えっ、いい考えだよね？」

イアルが不安そうにアリシアに尋ねると、

「グッドアイディアだよっ！」

アリシアは楽しそうに答えた。アリシアは快く思っているようだ。

「どうしてそれが取り引きなんだよ」

クランはイライラと尋ねた。イアルはまあまあと手を出して宥める。
その横でライアは指を顎にあてて考えるポーズ。

「私達はねっ、空の世界に行くことが目標なのっ！」

アリシアは興奮気味に捲し立てる。

「それで旅をして行く方法を探してるんだっ。だからお互いに好都合じゃない？ねっ、一緒に旅しよー」

アリシアは必死に説得。

「そもそも君達に選択権はないと思うんだけどなー。俺達に勝てなかったんだし」

イアルが後押しし、ライアはなんと、

「いいよ…」

と承諾した。

「そっちの君は話がわかるみたいだね。取り引き成立」

「なんでこんな人達と旅しなければいけないんですか…」

シリウスが毒づいたがそれに対しては誰も何も言わなかった。

「じゃ、早速つきあってもらおうかな」

イアルは凄く嬉しそうだ。

「何に？」

「…魔物退治に」

「魔物…？」

いまいちピンときていない2人。

それを見て、シリウスがとても驚いて尋ねた。

「空の世界には魔物はいないんですか！？」

「魔物…っつわれても、わかんねーな。どんなもんなんだ？」

「魔物はねっ、魔力を秘めた人間以外の生物の総称よ。様々な種類がをいて、かわいいのもいれば、醜い姿をしてるのもいるわ」

アリシアが、最初にライア達が歩いて来た方を指差した。

「ちょうどあっちの方は魔犬・コロンの生息地よ」

「……あれか」

「あれだな」

先程襲いかかってきた犬のようなもの。見た目では普通の犬と同じで全くわからなかった。

シリウスはしょうがないなぁと言わんばかりに首を振って教えてくれる。

「魔物は普通の生物とは決定的な違いがあるんですよ。魔物は、死ぬと消滅してしまうんです」

「消滅ってのはねつまり、魔物は魔法の力、魔力で構成されていて、死ぬと魔力を解放して光となって昇ってくってこと」

イアルが付け加え、２人は一応納得する。

「で、なんで俺たちが退治しなきゃいけねーんだよ」

「さっき了承してくれたじゃないか。俺達と旅をするって。俺達は旅をしながら魔物退治の依頼を受ける『クレラサー』っていう職業をやってるんだってば」

つまり一緒に旅をする以上、ライア達もそれを手伝うというわけで…。

「めんどくさ」

ライアがそう漏らした。。

「うわっ、本音言ったよこの子！俺達だって旅費稼ぐ為やってるんだから！趣味違うから！」

「イアル…この人達の話にいちいち反応するのはやめましょう。日が暮れてしまいます」

シリウスは呆れて他人を気にせず歩き出した。

「シリウス、どこいくんだ？」

「どこいくんだ？今の目的を忘れましたか？僕達の目的はこの人達のワガママに付き合うことじゃないでしょう？」

なんだか絶対零度の目で他人を見ている。

「ごめんごめん。今行くよ」

しかしイアルは忘れていた。一番最初にやる気の無さそうに寝ていたのがシリウスだと…。

第1章　5話

その後、歩きながら会話を交わす5人。

「まずは自己紹介だねー。仲良くなるためにはそれが一番手っ取り早いっしょ」

「自己紹介って…」

シリウスがげんなりする。

「僕はシリウス・ラプリエルです。よろしく。はい、もういいですね。後は勝手に…」

「他の人の話は聞こうねー。シリウス〜」

さっさと離れていこうとするシリウスを引き戻す。

「聞くだけだから。目的地まで遠いでしょ。今聞かないとあとがめんどくさいよ」

「……わかりましたよ」

シリウスは皆のペースで歩き出した。ただ目線の先はずっと前方において４人を見ていない。

「まあ、ああいう性格だけど気にしないことだね」

イアルが前のシリウスを気にしながら言った。

「じゃあ次は私ねっ。アリシア・フィルーレって名前です！よろしく。一応魔法使いだけど回復系専門ね。しいていえば防御系も得意かな」

そしてアリシアはライアをじっくりと眺めた。

「な、なんだ？」

「あなた男？女？」

まあここは男だと答えておくことにする。

姿を変えたんだからフィオナとして知っている人がいてもバレないだろ！女って答えろよ！とクランは言いたげだったが。

前に言った理由以外にライアは女は甘くみられるから嫌らしい。

宮殿生活の中でも何度か男女差別にあうことが度々あった。

以前はすっごく女の子っぽかったのに…、と頭を抱えるクラン。

「ふーん」

アリシアは曖昧な反応をして引き下がった。

「で、俺がイアル。イアル・グラテステン。そして君達…特に黒髪の子の方、これに興味もってるよねぇ」

イアルが大剣を見せてくれた。

「俺の家に代々伝わる剣なんだ。さっき見た通り魔力を吸収する力を持ってる。そしてそれを放つこともできる」

さらに剣を差し出して言う。

「試しに持ってみなよ。あと、これを持ってもらうことで俺らが君達を信用してると思って欲しい。なんにしろ魔法を防ぐ最強の武器だからね。勿論、俺達は君達を信じてるよ」

「…もう不意討ちはしない。クラン、持ってみて」

クランは言われた通り持ってみた。

「うぉっ、重くねーか！？」

思わず顔をしかめる。

「ライアも持ってみろよ」

言われてライアも受け取ったのだが…。

「！！」

剣の重さに負けて自分が倒れそうになった。

「悪い。お前は体力が嘘みたいにない貧弱者だった」

「ないのは認めるけど…嘘みたい&貧弱者って…少しへこむ」

イアルは剣を返してもらうと片手でくるくると回した。

「実はこれ１００?あったりするんだよね」

「一般人なら持てない！よ僕が正しい！持てる2人がおかしいんだって」

ライアは抗議する。

「ごめんごめん。じゃ、次は君達の番だ。今は簡単でいいよ」

少しムスッとしているライアは口を尖らせながら言った。

「ライア・フォレル。一般人未満の魔法使いだよ」

「…ははっ、よろしくライア。君とならシリウスもいい勝負になりそうだ」

なんだかバカにされているような気もするが一応大人しくするライア。

「俺はクラン・バルト。剣を使うけど…あっちに置いてきちまった……」

空を指差し、言えば言うほどナーバスになっていくクラン。

「わかるわかる。やっぱ愛剣がいいよな」

イアルはクランの肩をぽんぽんと叩きうんうん頷いた。

「大きな町にいったら武器屋にいっていいのを探そう。な？」

「ああ…（目を擦る）、お前いい奴だな」

剣を使う者同士通じ合うものがあったらしくすぐに打ち解けて話を始める2人だった。

第1章　6話

広い広い草原を風が渡っていく…。

しかしそれは突然ぱたりと止む。

止む、ではない。

止まざるを得ない。

地を覆っていた緑は段々と消えていき、

代わりに、

茶色い地面や、石や岩が増えてくる。

そしてそこに、それはあった。

突如現れる岩肌に、

大きな亀裂が入っている。

中は真っ暗で何も見えない。

魔物の住む場所。

「『光よ！我が道を照らせ』」

アリシアが大きな声で叫ぶと、ぽぅっと小さな明かりが灯った。

そう、この中を進むのだ。

退治を命じられた、

『害虫　バリニクス』

とやらを、倒すために。

しかしこの戦いは、あっさりと終わることになる。

バリニクスがどんな姿をしているか。

簡単だ。

巨大なカブトムシ。

その一言につきる。

虫が嫌いなライアとしてはあまり会いたくない敵だったが渋々進む。

そして暗く細い道を進み少し開けたところにバリニクスはいた。

その場所の頭上には大きい円形の穴が空いていて、暗闇に慣れた目には少し眩しかった。

バリニクスは反応して5人の方へと向きを変える。動くたびに地響

きが鳴る。

小さな家一軒ほどの大きさで、一般人なら腰を抜かしてしまいそうなそいつに、余裕そうな笑みでシリウスは言う。

「いつものパターンでいきますよ、イアル」

「りょうかーい」

アリシアはというと邪魔にならない場所で、体育を見学するような子供みたいな雰囲気でちょこんと立っていた。

「今回は俺達のやり方を見てもらうからライアとクランは待っててくれ」

そう、本当に単純かつ簡単だった。

シリウスが一瞬にして魔銃を両手に構える。

そして、撃った。

銃口からは不思議な赤い光が迸る。

それはちょうどバリニクスの脚の関節に当たったようだ。

「おっ」

クランが思わず声をあげた。

光が脚に当たった瞬間、弾け、燃え上がったのだ。

気付くと6本の脚全てが同じように燃えていた。

シリウスの早撃ちである。

「キュィィイーンンッ！」

機械音のようなものが辺りに響き渡る。

その高い音に思わず耳をふさぎたくなるが、シリウスは動きを止めずただ撃ち続ける…。

バリニクスの全身が炎に包まれつつある頃、ついに敵は動いた。巨大な羽を広げ、頭上の穴から空への逃走を図る。

「アリシア！」

シリウスが叫ぶとアリシアは両手を前に出し唱えた。

「『対象を包囲せよ』！！」

音もなく、ぽぉっ光る薄い膜が穴の端から現れてもう片方へとのびてゆく。

「ガンッ」

バリニクスがそれにぶつかった。衝撃で体勢を崩す。

するとバリニクスの体が仄かに光りはじめた。

「きますよ。イアル」

「わかってる……覚醒モード発動だな。そして俺達の…勝ちだ」

バリニクスはその身から光…魔力を放出させていた。これは攻撃体制に入った印。

しかしイアルにとっては大チャンス。

「イバンヌル」

自らの剣の名を呼ぶ。

そして…。

第1章　7話

イアルの剣に光が吸い込まれていく。

アリシアが、バリニクスに向かって

「『動きを止めよ、呪縛』」

そう唱えると、見えない何かに捕えられたかのように動けなくなったバリニクス。

そこへ光り輝く大剣を大きく振り上げたイアルが飛び出した。

「悪いが、おわってくれー！」

なんだかふざけたセリフである。

イアル自身は早く帰って寝たいという気持ちからそう叫んだのだっ

たが…。

そんな気持ちも知らず、バリニクスは抵抗を見せたがその努力は水の泡となる。

自らの魔力が自分自身に当たると大きな魔力反応がおこる。そしてそれは威力を増して返ってきたのだ。

「あーあ」

今度はクランがため息をつく。

「あ、いたんですか？」

「俺ってそんな存在感ないキャラだったっけな…って懲りないなお前も」

イアルとアリシアはとっくに諦めているようだ。

「チッ、ちょっくら外見てくるわ」

クランはライアを追って走り出した。ところが…。

「暗っ！前見えねー」

あかりの魔法を使ってくれる人もいない。

「なんだよもう」

いろいろなところにぶつかったり、つまずいて転んだり…。

戦闘に参加していないのに疲れてしまった。

ようやく光を見つけて外に出る。

クランが見た先にライアはいた。

ライアは空を見ていた。

「空が…」

「あ？」

見上げると先ほどの魔物の光が空へと消えてゆくところだった。

「空がどうした？」

ライアは真剣な眼差しでクランを振り返った。

もう先程の事は頭にないようだ。

単純…。

他のことに気を取られると前のことを忘れるのだ。

クランはまあいいかと息をついた。

そしてライアと同じく空を見上げる。

「空が違う」

ライアは独り言のように呟いた。

「空が偽物みたい…。アスクレスの空は、純粋で美しい青なのに。ここの空はまるで人工物だ」

「人工物とは見下げられたものだね」

いつのまにかそばに来ていたイアルが言った。

「うわっ、早いな」

クランはリアクションをするが、そんなイアルをライアは無表情で見返すと、

「さっきの光、空に溶けていくようだった。魔力は魔力にしか溶けない。そこから考え推理するにあの空は確かに人が魔法でこしらえた人工物だ」

確かめるようにライアは結論付けた。

「俺らは空の世界を知らないからなんとも言えないけど、君の言う通り魔法の力が関わっているのは学者達も発表して認められている」

そしてイアルはライアに試すように促した。

「空に向かって魔法をうってごらんよ。よくわかる」

ライアは少し首を傾げたが、手を空に伸ばして唱えた。

「『空を切り裂け、雷針』」

無数の光る針が「ジジッ」という音をたてながら空を突き抜ける。
その勢いは止まることなく高く昇っていく、が…。

それは突然、前触れもなくかき消えた。

「魔法が…」

「そう。原因がわかっていませんが、魔力を使うものは全てああなってしまいます」

シリウスとアリシアも知らないうちに隣にいて、みんな空を見上げていた。

「キュンッ」

不思議な音がした。それはシリウスの魔銃の発砲音。

魔銃から放たれた赤い光もまた、空高い場所でかき消えた。

威力が落ちたとか、そういう自然現象じゃない異常な消え方であるというのは、魔力に長けた者しかわからないのだが…。

「おーほんとだ」

なんにもわかってない無知なクランが反応して呟いた。

誰かのため息がもれる。

ちなみにこれは複数人のものだった。

「わかってないくせに意見を述べないで下さい」

「わからないのに喋らないでよ」

……。

ふんっ。

シリウスとライアは互いにそっぽを向き合った。

はぁ…。

イアルのため息がもれる。

「まあ…町に帰りましょっか」

イアルが先を歩くと、その後ろにシリウスとライアが左右約５メートルの間隔を空けて、そのまた後ろにアリシアとクランが途切れ途切れの会話を紡ぎながらついてくる。

実質的に４人を率いなければならないイアルは、これからの苦労の日々を思い、再び盛大なため息をついたのだった。

―２人を引き入れたのって…正解だったのか？
てか、俺は今日何回ため息をついただろう？

その答えは、神のみぞ知る。
バリニクスは最期の咆哮をあげた。

頭部と胸部、胸部と腹部が離れていく。

そして、端の方からキラキラと光る魔力となり外へ流れていった。

もはやあの巨大な図体の面影はどこにもない。

はじめから何もなかったかのような虚無感が辺りを包みこんだ。

「お腹が空いた」

突然全く関係ないことを誰かが口走った。

「お腹が空いた、って君ねぇ」

イアルが頭をかきかき参ったように言う。

「見てただけの君より俺たちの方がよっぽど働いたんだけど。そのセリフ、俺に言わせ…」

「お腹が空いた」

その者は意見をかえない。

「僕はここで退屈ながらも戦いを見学した。君たちのやり方はわかった。魔物についても理解した。ちゃんと見たしな。そして次に行うべきことは休息に決まっている」

「全くわがままな人ですね」

シリウスは心底呆れて首を振った。

偉そうに立っているライアに近付く。

「見た目に似合わない幼さですね。前は相当甘やかされてきたのかな？」

「……」

ライアは大魔法使いとして高い地位にいた。優しいおてんば娘と人気もあり確かに甘やかされた節もある。しかし…。

「お前に僕の何がわかる」

震える声で言い放ち、ライアはいつもの運動神経はどこへやら、風のように外へ走り去っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1077ba/

空からの破壊者

2012年1月6日17時52分発行